

# ハチ博士の ミツバチコラム

35



京都学園大学  
坂本文夫名誉教授  
(バイオ環境学部)

## ミイラと蜂蜜

先月、古代エジプトの養蜂について述べましたが、エジプトで思い浮かぶのはピラムッドとミイラではないでしょうか。エジプトでは死体をミイラにする過程で蜂蜜や

ミツバチはこれを巣板に塗ってばい菌の増殖を防いでいますが、その効果についても彼らは知っていたと思われる。

プロポリスが使われたという記録があります。更に、きれいに着飾った子供の死体を蜂蜜漬けにした甕（かめ）が発見されています。（渡辺孝著、ミツバチの文化史より）蜂蜜の強力な防腐効果を利用して死者を保存しようとしたのに違いありません。プロポリスは植物由来の抗菌性物質で、

人間は死ぬと肉体から魂が抜け出ていくが、肉体を完全に保存できれば、来世で魂は元の肉体に戻り、生き続けることができる。エジプトの人達は考えていたようです。魂が戻ってくる肉体を保存するためにミイラや蜂蜜漬けにしたわけです。ピラムッドは単に王の墓であるだけでなく、魂が生き延びる場と考えられていて、埋葬の時には生前と同じような食べ物や身の回り

品が供えられました。

もう一つ、蜜ろうにも大事な用途がありました。ミイラの傍らに死者を慰めるために色々な人形が供えられました。が、それらは蜜ろう細工のものが多かったそうです。丁度、日本の埴輪のような役割を果たしていたと思われる。日本では縄文時代以来、焼き物の文化が発達したのに対して、エジプトでは養蜂の文化が発達していたと言えるでしょう。



イラスト おおくぼひとみさん